

「白い木馬」より

ブッ
シュ
・孝
子

秋

山里にきて

久しぶりに秋とめぐりあった

ごめんごめん

こんなところでひっそりと

お前はもう幾年も空しく私を待っていたんだね

一九七三・九・一一

人生

私はまだ若かった頃には

今年の一月二十七日に、二十八歳の短

い生涯を終えられたブッシュ(服部)孝子さんの詩集、「白い木馬」が出版されます。多分、この雑誌が届きますところには皆さんのお目にふれていると思います。

著者、ブッシュ孝子さんはお茶の水女子大学家政学部児童学科を卒業後大学院に進まれ、その後大学院生としてドイツに留学され、その時に出会ったヨハネス・ブッシュさんと結ばれました。日本人とドイツ人ということなどをこえた人間としてお互いに心から理解し合っている結びつきであったということは、この結婚が決してすんなりと運んだものではなく、殊に孝子さんの乳がんという病かまひを知った上でのものであったということも、この詩集を読まれた方は深い感動をもつて感じとられると思います。

たまたまこの詩集のこと、ブッシュ・孝子さんのことが新聞で報道され、よくあることながら、それがもとで少々大げ

自分の好きな人生を歩めるものと思っていた
意志と努力とその上にほんのちよっぴり才能があれば
運など向こうからとびこんでくるさ

あれから

長い時が流れて今の私は考えている

そんな人生が歩めるのは

ほんのわずかの幸福な人達と

ほんのわずかのおろか者達だと

みんなが歩みたくない人生を歩いている

それでも一生けん命歩いている

一九七三・九・一〇

さにジャーナリストティックにそれからそれへと伝えられました。孝子さんが生前心から尊敬し、「先生がこの世にいらっしやるから生きていられる」とまでいわれた周郷先生は、「孝子さんをジャーナリズムの犠牲にしたくない！この詩集の本当の意義はもっともっと深いところにある、それを少しでもわかつてほしい」とおっしゃいました。

それで、縁もこくなつた五月末、ちょうど去年の同じころに孝子さんがヨハネスさんと一緒に訪ねられたという、秦野市渋沢の周郷先生のお宅へ、孝子さんのお母さんにいらしていただいて、先生と話していただきました。

山は春から夏へと移り変わる時で、杉木立の間の道はひんやりと冷たく暗く、その道をどんどん上って、大分行って、急に明るく開けたところがありました。アカシヤの切株があちこちにあつて、その根元からまた新しいアカシヤの枝が伸

ブッシュ・孝子さんを偲ぶ

《対談》
周郷博
服部和子

孝子さんの詩

S 幼児教育とか、教育とかいったものの基本にあるのは、人間とは、何かという問題ですけれどね。そういうふう to 考えると、孝子さんの詩は、本物だから、…そして独特のものだから、それを考えさせるものをたくさん含んでいると思いますね。

H 私はむずかしいことはわかりませんが、先ごろ日本にきましたサイモンと

ガーファントルのサイモンが、(彼が作詩作曲しているわけですね)

「ぼくは詩人ではない、しかし本当のことをいった時に、それが詩になるのではないだろうか」

といった言葉をきいて、ああ、まさしく孝子も、…詩人ではないけれど、本当に自分の心を感じたことと思つたことをしゃべった時に、皆さまがそれを詩として認めてくださったんじゃないかな、という気がします。

びていました。

「ああ、ここだ、ここでヨハネスさんと孝子さんと、たきぎを集めてご飯をたいたべたんだ。あの時、孝子さんはとてもいい顔をしてました」と先生はお母さんに話され、お母さんは静かにそのあたりを見ていらっしやいました。また歩き出すと、木苺の美しいオレンジ色の実がありました。「これは孝子の大好物でした」とお母さんがいわれて先生も私も口に入れました。そのほか、この詩集の装いでいを引きうけて下さった掘文子さんが、やはりここへいらして、先生と一緒と同じ山道を歩かれたとか、「その時に初めていろいろな草の名前を覚えてもらった。あの人は本当によく草の名前を知ってる人だ」と先生は、今度は私たちに「とうだい草」「破れ傘」など、珍しい名前を教えてくださいました。

それから先生のお宅へ帰って、お二人に話し合っていたできました。

S ぼくも孝子さんの詩を考えるとね、日本の詩人たち、白秋でも八十でも……言葉の魔術師ですね。戦後は、言葉の手工師、かな。それはまあ、いろいろな形になるものです。言葉というものの *logic* は……。そりゃまあずーつと深く

入って行くと哲学になるんだけど。そうじゃなくて、浅いところで言葉の手工師みたいなことをやってる人が多いです。そこへいくと、孝子さんの詩は違っています。そしてヨーロッパ社会のセンスも感じていますからね。日本の、花鳥風月、風景、というのと違うんです。聖書の言葉、あれも詩なんです。詩も、哲学、論理なんです。

孝子さんが初めにいっている、
“すなおな言葉で、本当のことだけを語りたい。”

H それに彼女は、いわゆる書きたい

とか、書かねばならぬということではないに、書かなくては行かない、みたいなものからできましたから、非常に気は楽でした。それに発表する気もありませんでしたし……。

“私は少し変なんじゃないかしら、のんびるる薬のせいで異常に興奮状態になったんじゃないかしら”なんて、最初詩が出てきたころは自分でもいつてました。

S 詩を書こう、なんていうんじゃないか、よく教会なんかでいいますね。聖霊にとらえられた……”とか……神はこっちがつかまえるものじゃなくて向う、つかまえてくれるものだ、なんていうでしょう？ そういうふうにつかまっちゃったわけです。いやでも、責任を果たさなきゃならない、突然それがくるわけです。詩を書きたい。詩にあこがれてたっていうわけじゃない professional な詩人

(日本にもいますけれど) とは無関係な

んです。詩という本当の言葉が出てきたんです。

それで最初のころ孝子さんは、その気持ち、自分は変わっちゃったんじゃないか……自分でも不思議で、そういう詩も書いてるわけです。

H 出てきたものが詩かどうか……初めは自覚がなかったようですね。

S しかし、だんだん自覚して、“これは詩なんだな”と思うでしょう？ そうすると“詩とはなんだろう”と同時に考えていかなきゃいけないのでした……。

さっきの“すなおな言葉で……”という詩に戻りますが、詩がどんどんわき出してきます。考えたんじゃないか、詩を、特殊な生命力だとすれば、生命っていうのは一つの *form* 形をもつわけですから、その形ができてくるわけです。できてくるっていうのを、ほっといたただのムードで終わらせないで、“言葉にしてくれ”

と、いつてでてくるんです。その興奮を自分で抑えているわけです。

この二行なんかも、ちょっと読んで、それだけで終われば何でもないことだけれど、これはほくら全体が反省すべきことなんです。自分の情性や我欲を切つて、はらいおとして、すなおな言葉で本当のことだけを語るようにならないと日本は危険ですよ。

そして自分が変わってきたんで、"私"っていうのは何者だ"と自分に問いかけている詩もあります。"私に"という詩ですが、自分というものが九月九日から明らかに変わってきているんです。

「お前はいつたい何者なのか？」

「お前の中に何がおこった」

「お前の中に何が宿った」

と不思議な自分に問いかけ

「何がお前をそんなにいらだたせているのか？」

これは、わき出してきた一種の興奮、ちょっと言葉が悪い……非常に重要な……重要なでもないや言葉だけれど……

非常にすぐれた、ほんとのものに出会ってゐるんですね。それをやらなきゃいけない……心のいらだちをえがいた詩です。

そういうふうに、私っていうものは、きびしき、病気などというものさえも超越してゐる状態になって自分を見てゐるわけです。

詩人という名で通つてゐる人より本当の詩人、驚くべき詩人なんです。

ぼくは本当は、自費出版で、ゆっくりと、本当にわかる人の中に、物事の考え方、人間の革命を、人類が生き残るために必要な革命がおこるように、静かに滲透していくことを願つてゐたんです。

H 彼女自身は本当にまだ、自分の詩がどの程度かなどということとはわからず、とも角、あの子は周郷先生に認めて

いただくことが、すなわち生きる自分の支えになつてゐたわけです。ですから先生がご推せん下さつて、しかも本になる

ということが、あの子がまだこの世の中で、何か自分がしなければならぬことがあるから、という精神的な支えだったのです。それがあの子の中に燃えていた時に、病魔との戦いに少しでもプラスになるのではないかと生きてゐる内に自分の詩集を手にして、それが次のまた生きる力になれば……と思ひました。

孝子さんというひと

H あの子は何ていうか、非常に傷つきやすい子でした。普通だったら、あんなに傷つかないと思ふんですけれども、その点は、非常に弱かつたんじゃないかと思ひます。

中学のころ、掃除当番をしていてちょっとした過ちでガラスをこわしてしまつ

たんだそうです。誰ということなしに……。それで、みんなで先生のところへ謝りにいこうということになって職員室へ行ったらいいんです。そして孝子はもうただ、謝る……姿勢をしていたところが、お友だちの一人、男の方が、「こういうわけでガラスがこわれました。いくら弁償したらいいでしょうか」っていったんだそうです。それが、非常に、ショックだったんですね。家へ帰ってきてひどいしよげ方で、「お母さん、そういうもんじゃありませんか？ やっぱりごめんささいって最初にいわなくちゃいけないんじゃない？」っていうことを涙をいっばいためて、私に話す。そういう子なんです。

そして、いつもひとの心みたいなものを求めていたと、私は思います。

モーツァルトが五歳の時に作曲した曲があるって、ある作曲家が書いてたんで

すけど、……そのモーツァルトは、自分の家へお客がくると、「あなたはほくのこを好きですか」ってきいたそうです。

お客が「もちろん好きだよ」っていうと、モーツァルトは「ほんとに？ほんとに？」って目に涙をうかべてうれしうにした少年で、「その少年の本当の気持ちが出ているのがこの曲なんですよ。それで私はこの曲がたまらなく好きなんです」と説明しながらピアノの宮沢明子さんが演奏なさったのをテレビで見ることがあります。そして、もちろんモーツァルトの才能の面ではなしに、気持ちの面で、同じようにうちの孝子が本当にいつも何かを求め、求めて、そして傷ついていたんだなと思いました。

それが大学へ入って、周郷先生との出会いで、一気に、あの子の人生がそこから始まったんじゃないか、と思うようになったんです。私も両親があの子に生

命を与えたのだとしたら、あの子に人間としての本当の精神をふきこんで下さったのは周郷先生じゃないかと、子どもが育っていく時に、出会いということが、いかに一人の人間にとって大切かということをしみじみ感じております。もちろん、求めていなければこの出会いはなかったかもしれませんが、本当に幸せな子だったと思います。

S 前にもちょっとお母さんから聞いたことがあります、今改めてお母さんからきくとぼくにとってはなお驚くようなことがありますね。ぼくは、孝子さんがそういうふうに変ったということを知らないで（ちょっと言葉が足りないんです）今度はフランクフルトへ行つた孝子さんに会った時なんか、ぼくの方が反対にめがさめて生き返るような影響をうけるわけです。

教育っていうのはね、人間が人間に与

える影響みたいなものは、いいものを与えた時も、与えた人はわからないんです。その逆に、悪いことも知らない内に与えているんです。人の成長して行く命をこわしていることもあるのです。それをいろいろへ理くつをいって、私は教育をしたなんていっちゃだめです。それよりも違うんですね。

H 私はいつも思うんですけれど、子どもってというのは生まれた時から胸の中に何本かのろうそくをもっていて、それに火をつけられる人が世の中には何人かいる。その人との出会いによって、できるだけはなやかにその心のろうそくに火がともったら、その人間は一番豊かに過ごせるんじゃないかって……。ですから、いくら親がつけようと思っても、親ではつけられないろうそくみたいなものが心の中にあるんじゃないかって思っていますね。その点孝子は、二十八歳の生涯

でしたが、私なんかよりもよっぽどろうそくの火もともったし、親として、心から喜んでおります。

S 私は今でもヨーロッパで会った時の、孝子さんのキラキラした太陽のような瞳を思い出すんですが、ヨーロッパへ行って、ぼくなんかがとでもできなかったような出会いを、また孝子さんはしたわけです。そういうことを考えると、本当はこの詩集をいいものにして出して、「弁償すればいいでしょ」ということを心から悲しむ、そういう気持ち、それがずっと伝わっていくように……と願うんです。

H あの子は本当に、小さい時から飼っていた金魚が死んだりと、普通ちょっと泣く子はいくらもおりますけれどその悲しみ方が本当に、どうかしたのじゃないかと思うくらいに、さめざめと泣くんです。そうすると、ある程度までは

大人っていうのは理解するんですけれど、あんまりめそめそしてるとかえって、「いつまでもそんなこと」なんてとがめだてするようになるんですね。それで、私なんかも反省するんですけれど、ああいう子っていうのは、もつと強くしなきゃなんていう大人の勝手な考えで傷つけてたんじゃないかと思うんです。子どもってというのは、ひとりひとり気持ちが違っているものなんですから、かわいそうなことをしたんじゃないかって今になって思っております。本当に傷みややう子だったんだなあって。

S それが本当の「人間」じゃないんですか？

今のように科学が進み、社会は管理社会みたいになって、自然破壊、公害……こういふところへきたら、こういう人が地球の未来を破壊から救う心の所有者なんじゃないか、と思いますね。

ヨハネスさんとの結婚

—お母さんとの出会い

H 実は、先生がヨーロッパから帰られてお電話を下さいましたところに、そろそろ日本へ帰ってきたらという話がちあがっております。ところが、孝子は、ちょうどそのころヨハネスとめぐり会ったわけです。それでどうしてもと彼と理解し合うためにも留学をのばしたいとってきておりまして、結局私が主人を説得したような形でそれが叶ったわけです。そしてその時先生が、

「孝子さんはきつと、ドイツにいても、何かをつかんでくる人ですよ。だからドイツの生活を続けさせて上げて下さい」とおっしゃったその言葉が私の迷いをたち切ってくれたわけです。そして、「お前がどうしてもそれをしたいのなら、もう少しそこにおいてそれをしてきな

さい。心ゆくまで彼との交際（それもお前の重要な人生なのだから）とももちろん学問も重要なことだからつづけてきなさい。私はお前を援助します」

といてやりました。そして、そのあとの彼との交際、ウィーンの森を歩き、話し合い、そういう中で彼とのことをつめていったと思うんです。

S 去年、二人で訪ねてくれて山へ行った時も、結婚というものは非常に重大なものだといっていましたよ、いかげんじゃない……。

その時ヨハネスのお母さんの話もききましたけれど、とてもそのお母さんと気が合っていたんですね。そしてこの結婚についても孝子さんは、普通の人が考えないようなことまで深く考えたと思います。

H その、留学をのばしたことによつ

て、彼のご家族との交際も深まったようですし、何よりもお母さまが、非常に孝子をかわいがって下さって、結婚する時点においては、どちらかといえはヨハネスよりお母さまとの結びつきの方が強かったのではないかと思うくらいです。

S そして、結婚した翌年の一月二十七日にそのお母さんががんでなくなり、その二年後の一月二十七日に孝子さんもなくなったわけです。

H 孝子が日本へ帰ってきてから、本当にお母さまはよく手紙を下さって……孝子はいつも「お母さんは、いい手紙を下さるのよ」といって私にもところどころ訳してくれました。とてもユーモアがあつて愛情にあふれていて「もう一度私のこの腕にあなたを抱きしめたい」と結んでありました。

S そう、ジャーナリズムがドイツ青年とがんで死んだ日本女性の愛の記録、

なんていいますけれど、そんなものじゃないですね。むしろお母さんとの出会い、ふれあい、ですよね。

H そうなんです。そしてヨハネス自身も、孝子を通して、改めてお母さんを見直してらんです。この指輪はヨハネスのお母さまのおかたみとして孝子のところに送ってきたもので、お母さまがいつもはめていらしたものだそうなんです。そうしましたらヨハネスが、"母がもし生きていたら、とんできてきみを看病するだろうに" っっていついてるっっていうことを孝子からきかされました。それで私は、"それじゃあ、この指輪を私のはめて、こっちはヨハネスのお母さまの手、こっちは私の手ということにして看病するから元気になって" っっていうことで私のはめたんです。でも、そのかきもなく孝子がなくなりましたので、ヨハネスにこの指輪は返しますっって申したら、彼が

"お母さんは死ぬまで私のお母さんでいてほしいから、ずっとはめていてください" っっていついて私にくれたものなんです。

S この詩の中にも"私のドイツのお母さん" という詩がありますけれど、そういうお母さんとの深い出会い、そしてお母さんが死に、孝子さんが死に、今度はヨハネスにとってはこの孝子さんのお母さんが"本当のお母さん" なんです。こういうところが、今の日本の社会にはもうないような、深い、神秘的なものをもっている"愛" なんです。

H 本当に私にとつても今は、彼が生きがいなんです。私はドイツ語ができませんし、彼がローマ字でいいといっつくれますもので、"元気ですか、からだに気をつけてください。何でもたべてください" っただけの手紙なんですけれど彼は喜ぶんですよ。この間も母の日に、"今、

お母さんは一人だから、ぼくの愛の全部をあなたにあげたいです" っっていうローマ字の手紙がきました。

S 孝子さんがなくなつて、二日か三日目でしたかね、三人で話したとき、ヨハネスはお母さんの手を握つていいましたね。

"あんまり心配しちゃだめです。からだを悪くするから、私のお母さん" っして"孝子は私にとつて聖人でした" っって日本語でいいましたね。今までの話のような背景があつて初めてこの言葉がでてきたわけですね。それだけの意味があるんです。

おわりに

S お母さんはつくづくいいましたね。生きてる長さじゃないんだって…… ぼくも本当にそう思いますよ。そこへ行くくと、ちょっとぼくなんか生きすぎたな。

H 私もこの二十八年間を省みて、私もあの子によって、孝子がああいう娘で

なかつたら私はこういう人生を送れなかつたんじゃないかっていう面がたくさんあります。私はあの子に何もしてやらなかつたんですけれど、あの子の方から、

あの子が本当に何かしたいと思う時に私がか、あの子の気持ちを通すような役目をたまたましたものですから、その点非常に感謝していたらしいということをお友だちからききました。しかし

私はあの子から、あの子の書いてくれた手紙で広い世界を知り、心の世界までも広くしてもらいましたし、幸せだったと思います。ただあの子自身が、もう少し生きていたかっと思うとふびんで……。

S しかし、ああいう詩を、なくなる三ヵ月前ごろから書き出したわけですけど、本当に「愛」が生きている、死に

上に生きていくということを感じますね。

最後に「出会い」ということをもう一度考えたいと思います。

お母さんというものは、子どもを生んだらそれでもういいっていうもんじゃありませんね。やっぱり第三者が中へ入るか、仲介するかということで母と子も出会わなきゃいけないんです。今は生んだだけで出会ってないんです。

H そうです。そしてそれが長ければなおいいですね。彼女が死んでつくづく感じましたのは、先生をはじめ、いろいろな方が彼女の心の中に何かを与えて下さっているんです。ヨハネスはもちろん、お友だち、ドイツで知り合った方々……彼女はこの世にもういないのに、いる以上に私に何かを残して、くれていったんだなあと思います。もし、生命というものが本当にあるんだったら、こういう

ことをいうのじゃないだろうかという感じがします。

S 本当にそうです。今の日本では、一緒に住んでいても出会いがないんじゃないでしょうか。こういう性質の出会いが日本人にもっと広くおこってくれるように、この詩集が役に立つようにと心から思います。いわゆる、皆が詩といっているものと違う詩ですからね。多分ドイツもその内に出て向こうでも評判になると思います。そういうふうに見える、島国的な狭い世界でなく、ヨーロッパも含めた世界の中の日本という心が生まれてくることを、この機会に孝子さんとも望みたいと思います。

(一九七四・五・三〇)